定に見えたりとて、あまた同樣にかたれば、心もえでとしもくれぬ、さて次のとしの九十月にもなりぬるに、さきぐいでくるほどなれば、山に入て茸をもとむるに、すべて蔬おほかたみえず、いかなる事にかと、里國の者思ひてすぐるほどに、故仲胤僧都とて、說法ならびなき人いましけり、この事をきゝて、こはいかに、不淨說法する法師、平茸にむまるといふことのある物をとの給ひてけり、さればいかにも〳〵平茸はくはざらんにこそかくまじき物とぞ、

〔古今著聞集十八飲食〕觀知僧都、九條の太政大臣（藤原兼實）のもとへ、ひら茸をおくるとて、そえ侍りける、

ニたいらかに平のきやうにすむ人はひらたけをこそくふべかりけれがへし相國、

平茸はよきむしやにこそにたりけれおそろしながらさすがみまほし

〔源平盛衰記三十三〕光隆卿向木曾許附木曾院參頑事

猫間中納言光隆卿宣フベキ事有テ、木曾ガ許ヘ座シテ、先雜色シテ角ト云入ラレタリ、（略）中木曾モ其時意得テ奉レ入、見參シケリ、暫物語シ給ヒテ、木曾根井ヲ招テ、ヤ給ヘナンデマレ、饗申セト云、中納言、淺猿ト思ヒテ、只今不可有宣ケレ共、イカヾ食時ニ座シタルニ、物メサデハ有ベキ、食ベキ折ニ不食ズ、粮ナキ者ト成也、トク急ゲ急ゲト云、何モ生シキ物ヲバ無鹽ト云ワト心得テ、無鹽ノ平茸モアリツナ、歸給ハヌサキニ早メヨ〳〵ト云ケレバ、中納言ハ斯由ナキ所ヘ來テ、耻ガマシヤ、今更歸ランモ流石也ト思テ、宣フベキ事モハカ〳〵シク不被仰、興醒テ堅唾ヲ呑テ御座ケルニ、何鹿田舍合子ノ大ニ尻高ク、底深ニ生塗ナルガ、所々剝タルニ、毛立シタル飯ノ黑ク籾交ナリケルヲ堆盛上テ、御菜三種ニ平茸ノ汁一ツ折敷ニ居テ、根井持來テ、中納言ノ前ニサシ居タリ、大方ト（カヾ）云計ナシ、木曾ガ前ニモ同ク備タリ、木曾ハ箸取食ケレ共、中納言ハ青興醒テメサズ、木曾是ヲ見テ、如何ニ、猫殿ハ不饗ゾ、合子ヲ簡給歟、アレハ義仲ガ隨分ノ精進合子、アダニモ人ニタバズ、無鹽ノ平茸ハ、京都ニハキト無物也、猫殿只搔給ヘ〳〵ト勸メタリ、